

## ●平成17年度第3回男女共同参画推進委員会議事録

日 時：平成18年3月29日 19時～20時30分

場 所：前橋商工会議所第一委員会室

出席者：宮崎，小田-望月，下山，高松，持田，鈴木，宮坂，水村（委員長），

富永（オブザーバー，IUPS男女共同参画委員会副委員長），勝亦（オブザーバー，若手の会運営委員）  
（順不同）

### 議 事

#### 1. 第2回企画シンポジウムについて

当委員会と若手の会との共催で，生理学会大会2日目（3月29日）の9時より，宮坂委員の司会で開催された当シンポジウムについて感想が述べられた。ほぼ会場がいっぱいになるほどの参加者があった，前回と異なり若い男性の参加者が多い傾向が見られたのは若手の会の宣伝の効果があったものと考えられる。まとめを宮坂委員が作製し日生誌に掲載してもらうこと，また講演録を日生誌のWeb版または生理学会ホームページに掲載してもらい，まとめにURLを記載することで参照できるようにすること，とした。

#### 2. 若手の会との連携について

次期委員の人選の際には若手の会からも正式の委員を加えるよう，次期委員長の高松委員に依頼した。

#### 3. IUPSにおける男女共同参画委員会の設立と本委員会の関与について

水村委員長より，IUPS総務委員会の中に男女共同参画委員会が設立され，その委員長として水村が，副委員長として富永真琴先生が選ばれたことが報告され，保育室の運営，シンポジウムの開催等を企画する予定なので本委員会の協力を得たいとの希望が述べられた。委員会として協力することに異議はなく，企画について討論された。シンポジウムに参加してもらう国の選定では，欧米化を目指して先進国指向で行くか，様々な問題点を知るという観点で先進国に限定しないことにするか，シンポジウムの目的をはっきりさせる必要が提起された。また，保育室で預かれないような年齢の子供に対するキッズプログラムや，昼食をたべながらのシンポジウムはど

うか，等の新たな提案も出された。今後両委員会が連携を取りながら準備を進めることにした。

#### 4. アドバイザー制の運用について

運用開始から1年経過したが，利用者が今までに1名しかないという状態について話し合った。今回オブザーバー参加していただいた若手の会の勝亦さんもアドバイザー制を知らないということであったので，もっと宣伝が必要であることが認識された。まず，小田-望月委員がメーリングリストへ案内をながし，日生誌に案内記事を掲載し，また大会プログラムにも掲載できないか高松委員が調べることとなった。さらに，今後も継続的に宣伝を行うことが確認された。

#### 5. 保育室運営について

前橋大会でも大会会場内に保育室が設置され，7名（申し込みは8名，1名は病気のためキャンセル）の子供の利用があったことが水村委員より報告された。保育室設置に本委員会が尽力していることについて知らない人もいたので，時々日生誌で紹介するなど，宣伝が必要であることが認識された。

#### 6. ポスター展示について

持田委員の尽力により，委員会活動について大会3日間ポスター展示が行われた。しかし，ポスター設置場所が人目につきにくいところであったので，多くの人に見てもらえたとは思われない。次回は一般ポスターと同じ場所に展示させてもらうなど，大会幹事側に要望する。

#### 7. 産休・育休後の復帰支援特別研究員制度（RPD）について

制度の周知のため，生理学会のメーリングリストへ情報を流すことにした。水村が担当する。

## ●第16回日本生理学会将来計画委員会議事録

日 時：平成18年3月29日 19：00～21：00

場 所：前橋商工会議所第二委員会室（前橋）

出席者：前田信治（委員長）、上坂伸宏、久野みゆき、久保義弘、辻岡克彦、徳永 太、西田育弘、八尾 寛、森田啓之、氷見直之（オブザーバー）

欠席者：彼末一之、黒澤美枝子、小西真人、中島龍一、二科安三、松尾 理、宮川尚久

### 報告事項

委員長から今まで審議を進めてきた以下の事項についてその後の経緯等について報告された。

#### (1) 日本生理学会執行部の選出方法について

この件について、平成17年12月3日の第2回常任幹事会での審議結果を受けてメール上で議論を続け、委員会案を作成し、平成18年3月27日の第1回常任幹事会に諮ったところ一部を修正して承認された。この修正案は同年3月29日の総会・評議員会で日本生理学会規約の所定の改定と併せて承認された旨報告された。なお、執行部から直ちに新しい体制に入るために所定の手続きに入り、平成19年の総会で次期会長を決定し、会長によって指名された副会長が同年の常任幹事会で承認され、平成20年の総会で新体制による会長・副会長が就任することが報告され、その時点で旧体制の前執行部は辞任し、新体制に入れ替わる旨が提示され、承認を受けたことも併せて報告された。

#### (2) 将来計画委員会からの提言について

平成17年12月3日の第2回常任幹事会で将来計画委員会から提出された「生命の理（いのちのことわり）：生理学教育と研究における問題と提言」は将来計画委員会名で日本生理学会のホームページや日本生理学雑誌に掲載することが承認された旨報告された。なお、この提言は将来再検討・手直しされ、日本生理学会として適当な方面に提言される可能性があることが常任幹事会での発言にあったことが追加された。

#### (3) IUPS長期計画委員会からのアンケート調査について

平成17年12月3日の第2回常任幹事会でIUPS長期

計画委員会からのアンケート調査を日本生理学会会員に実施し、その回答を踏まえて日本生理学会としての回答を将来計画委員会が取りまとめることになった旨報告があり、平成18年3月27日の第1回常任幹事会で委員長が経過報告を行い、将来計画委員会からIUPS長期計画委員会へ回答する方向で承認されたことが報告された。

### 審議検討事項

#### (1) IUPS長期計画委員会からのアンケート調査に対する回答について

日本生理学会会員から寄せられた回答を集約した委員長原案について日本生理学会としての立場から検討を行った。質問の趣旨、会員からの回答に追加すべき点、削除すべき点、など個々の質問について検討を加えた。本委員会の時間内では全ての質問事項を詳細に検討することはできなかったが、質問の意図は委員全員が理解し、検討できなかった質問については各委員が委員長に回答を送り、委員長がまとめることで了解され、その取り扱いは一任された。

#### (2) 科学研究費補助金審査委員の推薦について

委員長から科学研究費補助金審査委員の推薦の現状についての説明があり、生理学会からの学術振興会への審査委員候補者の推薦が重視されつつあることが報告された。しかし、審査員の選出は学術研究委員会での重要課題の一つでもあり、学術研究委員会委員長と相談のうえ、将来計画委員会から学術研究委員会へ提案する形で検討を進めることとした。

#### (3) 日本生理学会の倫理規定の制定について

他の学会で制定している倫理規定を参考にして今後議論を進め、日本生理学会としてまとめる方向で

検討することとした。

(4) その他

今後、将来計画委員会で議論すべき問題として、次期委員長から医学部外出身の研究者の生理学会への参画を促す方策について検討したい旨の発言があ

り、了承された。

本委員会でもって前田信治委員長（愛媛大）は退任し、次期辻岡克彦委員長（川崎医大）に引き継いだ。

## ●第29回循環グループディナーの報告

日 時：平成18年3月28日（火）午後7：00～9：00

会 場：群馬ロイヤルホテル（群馬県前橋市）

参加者：55名（一般45名，大学院生10名）

第83回日本生理学会大会（平成18年3月28日～30日，群馬県前橋市）において，恒例の循環グループディナーが，金沢医科大学・生理機能制御学の芝本を世話人として開催されました．今回は以下のプログラムで行いましたので，ご報告致します．

(1) 開会の挨拶：世話人の芝本による開会の挨拶

(2) 循環グループディナー発起人のご挨拶：二宮石雄先生（広島国際大学名誉教授）

(3) 乾杯のご発声：菅弘之先生（国立循環器病センター研究所・所長）

(4) ディナーと歓談

(5) JJP循環部門最優秀論文賞の表彰式：

JJP2005年第1号から2005年第6号までの1年間における循環に関する論文の中から，12施設12名の選考委員の審査（推薦）により，東京都老人総合研究所の内田さえ先生による論文“Cutaneous Mechanical Stimulation Regulates Ovarian Blood Flow via Activation of Spinal and Supraspinal Reflex Pathways in Anesthetized Rats”が最優秀論文に選定されました．世話人である芝本が表彰状と賞金の授与を行いました．受賞者のスピーチと論文紹介がありました（学会HP参照）．

(6) 循環グループ研究論文についての総評：大橋

俊夫先生（信州大学大学院医学研究科・器官制御生理学・教授，JJP循環部門編集責任者）より循環部門最優秀論文賞及び循環研究全般について総評をいただきました．

(7) 新任教授のご挨拶：

照井直人先生（筑波大学大学院・人間総合科学研究科）：同講座の教授にご昇任（昨年4月より）．

坪田裕司先生（和歌山県立医科大学・生理学第二講座）：大阪リハビリテーション大学・生理学講座の教授にご着任（本年4月より）．

(8) 循環シンポジウム総評：西田育弘先生（防衛医科大学校・生理学第二講座・教授）より循環シンポジウム開催の経緯等についてお話しいただきました．

(9) 各講座・研究室の紹介：名簿順に各講座・研究室の紹介や近況報告をいただきました．

(10) 次回開催担当者のご挨拶：前田正信先生（和歌山県立医科大学・生理学第二講座・教授）

(11) 閉会の挨拶：世話人の芝本による閉会の挨拶

平成18年4月12日

（文責，世話役：金沢医科大学・生理機能制御学  
芝本利重）

## ●第30回シナプトロジストの会 概要

### 幹事会議事録

日 時：2006年3月28日（火）18：40～19：00

会 場：前橋東急イン

世話人：持田澄子（東京医科大学）

出席者：小澤滯司，赤須 崇，田中永一郎（東 英穂 代理），佐々木和彦，松井秀樹，  
鍋倉淳一，平野丈夫，高橋智幸，久場健司，八尾 寛（敬称略，順不同）

### 報告・協議事項

1) 本会の参加者および予算概算について報告した。今回は、神経生物学グループディナーと合同で、特別招待者として Roger Nicoll 先生と Andrew Matus 先生を迎えており、神経生物学グループディナー参加申込者が10名、シナプトロジストの会参加申込者が63名であったことを報告した。2) 平成19年開催予定の「第31回シナプトロジストの会」の世話人として、協議の上、大阪大学 小倉明彦先生にお願いすることとし、内諾を得た。3) シナプトロジストの会としてグループディナー賞を設けるか否かについて協議し、今後さらに協議していくこととなった。4) 幹事長小澤滯司先生から、次期幹事長として高橋智幸先生が推薦され、次期幹事長に高橋智幸先生が就任された。

### 懇親会の概要

日 時：2006年3月28日（火）19：00～21：00

会 場：前橋東急イン（中2階）紅雲

内 容：Dr. Roger Nicoll と Dr. Andrew Matus のスピーチと両博士を囲んでのディナー

神経生物学グループディナーと合同開催された本会に出席した人は、75名を超え、そのうち約4分の1が学生・大学院生であった。小澤滯司先生から Roger Nicoll 博士を、白尾智明先生から Andrew Matus 博士を両博士との出会いを交えて紹介していただいた後、両博士からこれまでの研究とこれからの研究についてお話していただいた。Roger Nicoll 博士は Long-term-potential (LTP) 研究に関わる興味深い体験談や研究の進展について語られた後、分

子生物学的方法を応用したシナプス前終末・シナプス後細胞の機能解析に加えて、神経回路機能解析の重要性について述べられ、これからのシナプス研究の方向性を示された。Matus 博士は、dendritic spine の動きに関する研究における cytoskeleton 分子や調節分子の発見とその機能解析・シナプス可塑性について述べられた。

高橋智幸先生による乾杯の後、多くの参加者が Nicoll 博士と Matus 博士を囲んで親睦を深めていた。特に学生・大学院生にとっては、このような著名な科学者と直接語りあったことは貴重な体験であり、人生の忘れられないひとコマになったであろうと思う。

佐藤誠先生の呼びかけで、20世紀前半のシェリントンの研究室に由来する「シナプトロジスト」という名称をいただいて発足した「シナプトロジストの会」は、今回で第30回となった。幹事会で佐々木和彦先生から配布された資料には、「新しい学問の発展のためには同志の結集がまず必要で、自分たちのやっていることこそ最も大切な研究なんだという事を自他共に認識しあうグループがなければならない」と、発足当時の佐藤先生の思いが綴られていた。今回参加された若手研究者や学生・大学院生は、Nicoll 博士や Matus 博士と同じ分野の研究をしていることを誇りに思い、研究室に戻って熱い思いで実験を再開するであろうことを確信した。

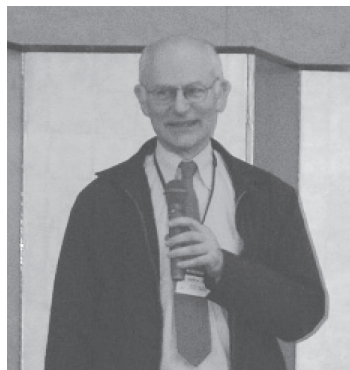
私事であるが、「シナプトロジストの会は、pre が post を包み込むシナプスのように、人と人との繋がりを育む会でありたい」と本会の発足を呼びかけられていたように記憶している。鹿児島での第1回シナ



Dr. Roger Nicoll

プロジストの会で佐藤誠先生が美声を披露してくださったことを思い出し、第30回となった前橋でNicoll博士とMatus博士への感謝の気持ちも込めて、「さくら・さくら」を参加者全員で合唱した。

神経生物学グループディナーからは、植村慶一先生、小幡邦彦先生、神経生物学グループディナー世話人の柳川右千夫先生のご挨拶をいただいた。



Dr. Andrew Matus

なお、幹事長小澤滯司先生と次期幹事長高橋智幸先生の抱負のご挨拶をいただき、小倉明彦先生（大阪大学）に次会世話人をお願いしていることを報告した。閉会予定の時間を過ぎてもNicoll博士とMatus博士を囲む輪があった。

今回は、小澤先生のご提案で、外国からの招待講演者をお招きした。初めての試みであったが、出席者の増加につながった要因の一つではないかと推測している。

末尾ではあるが、本会の会計事務を担当していただいた田井忍氏に謝意を表するものである。

（文責 持田澄子）

# RECORDS

---

## ●第83回日本生理学会大会 感覚合同グループディナーの報告

日 時：2006年3月28日（火）19：00～21：00

会 場：前橋東急イン

出席者：27名

本グループディナーは種々の感覚の研究者が交流を深める目的で開催されています。出席者の専門分野は、視覚、嗅覚、味覚、聴覚と広範でした。また、学生の出席もありました。

はじめに慶應義塾大学環境情報学部の福田亮子先生に「目は口以上にものを言う」と題する講演をしていただきました。被検者が視野中のどこを注視しているかをモニターし、それを解析・検討する研究が紹介されました。工業的応用・教育分野への応用にも話題がおよび、視覚研究者はもちろん、他の分

野の方々からも活発な質疑討論が行われました。続く懇親会の席でも参加者と交流していただきました。

懇親会は橋本葉子先生のご発声による乾杯で始まりました。その後、食事をしながら諸先生にスピーチをしていただき、さらにご歓談いただきました。

今回は嗅覚の倉橋隆先生（大阪大学大学院生命機能研究科生理学研究室）をお願いして散会となりました。

（文責、世話役：埼玉医科大学医学部生理学講座  
渡辺修一）

## ●平成17年度選挙管理委員会報告

日本生理学会選挙管理委員

委員長：川上順子

委員：岩田幸一

高松 研

### 1. 平成19年度科学研究費補助金の審査委員候補者選考

#### 経過

①平成17年12月26日：常任幹事へ被選挙者の選出依頼（メールにて）。投票は、メールにて行われ、事務局でアドレス部分を切り離して無記名投票とした。

②平成18年1月11日：選挙管理委員による常任幹事の投票を開票（岩田幸一，高松研，川上順子，生

理学会事務局）

③平成18年1月16日：常任幹事により選出された候補者一覧表から評議委員投票依頼。今回は、分野を越えて複数の分野へ投票可能とする。

④平成18年1月16日：同時に常任幹事の投票も各地域評議委員へ依頼する。

⑤平成18年2月14日：選挙管理委員による評議委員の投票を開票（岩田幸一，高松研，川上順子，生理学会事務局）

#### 常任幹事への投票依頼の書式

##### 1) 委員候補者数

<分科>	<細目>	<第一段審査>	<第二段審査>
生 理	生理学一般	15	}
	環境生理学 (含体力医学・栄養生理学)	9	
神経科学 (含脳科学)	神経生理学	9	}
	神経・筋肉生理学	9	
生物科学	筋肉生理学	9	}
	生物物理学	5	

##### 2) 選出の対象者

評議員全員

##### 3) 投票方法と選出する人数

第1段審査委員候補の投票は5つの細目および亜細目すべて、第2段審査委員候補の投票は3つの分科すべてについて番号と名前を記入してください。（やむをえず一部の細目，亜細目，分科にのみ記入された場合にも無効にはなりません。）

番号とお名前が食違った場合は名前を優先させる。

##### 4) その他

1. 投票期間が短いので電子メールによる投票を行います。開票時には事務局の責任で電子メールアドレスを切り離し無記名として扱います。

2. なるべく重複を避ける方向で投票をお願い致します。

3. 開票は選挙管理委員会が行い，上位から推薦すべき人数の約1.5倍の候補者を評議員の投票にかけ，その投票により上位から推薦数の者を日本学術振興

会に推薦します。

5) 提出期限：平成18年1月10日（火）（厳守）

#### 評議委員への投票依頼

常任幹事投票で出された候補者名簿を分野別に投票用紙の色を変えて印刷し、○印をつけて投票する方式を採用。今回は、分野を越えて複数の分野に投票できることとした。

#### 投票結果

一段：生理学一般10名、環境生理学6名、神経生理学9名、筋肉生理学11名、生物物理学5名。

二段：基礎医学15名、神経科学5名、生物科学5名を選出。

これらの名簿と、今回新規に選出された入来篤史、木村 實、本間生夫、持田澄子の先生方のデータ登録をした。

#### 総括

(1) 分野を越えて複数の投票を可能にしたことで、投票数が大幅に増大した。細目別での最低投票数は127票、選抜個人の得票数は最低で46票となり、批評に耐える得点数となった。

(2) 分野を越えて複数の投票を可能にしたことで、返信用封筒が小さすぎ、入りにくかった。

(3) 投票の時間が短かった。もう少し早く準備を行うほうが良いが常任幹事会が終わった後とすると、

この時期になってしまう。

(4) 投票率は変わらず30%程度であり改善がない。投票までの時間が短いためか、常任幹事の投票率も100%にはならず、改善が望まれる。

(5) 開票作業は、現在手仕事であるが、会長選挙がこれに加わることになるのであれば、Web上での投票やカードリーダー等方法を考慮すべきと思われる。

## 2. 常任幹事の改選

平成17年度で任期が終了する常任幹事の改選を同時に行った。北海道1名、東北1名、関東2名、東京2名、中部3名、近畿2名、中国四国1名、九州2名を選出することとなった。平成18年度より東京の定員が1名減少した。

#### 総括

(1) 投票数が少なく、さらに得票がばらつくために選出者の得票数が少ない。

(2) 得票数同数の場合の規程が曖昧であるため、其の改変を求めた。第83回生理学会において、付則に「同数の時は会長が判断する」に改変された。

平成18年3月

日本生理学会選挙管理委員会委員長

川上 順子